

英語の前置詞補文化辞ofとその擬似補部について

稲田, 俊明

<https://doi.org/10.15017/2332597>

出版情報 : 文學研究. 86, pp.87-103, 1989-02-28. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

英語の前置詞補文化辞 of とその擬似補部について

稲 田 俊 明

1. 名詞の補部に現れる「命題」を選択する前置詞句

本稿の目的は名詞主要部に続く前置詞句の特質を考察することである。特に、下記の下線部の意味と構造にはその名詞主要部の語彙的特性が投射されていることを示したい。

- (1) a. There came the unmistakable sound of the outside door being opened downstairs. (LTC 56)
- b. The sight of chemicals changing colors would make her take leave of her senses. (LTC 44)
- (2) a. A horrible vision of myself working in my father's bakery popped into my mind. (LTC 35)
- b. There won't be any record of you ever having seen the book. (UW 17)

これらの下線部は、一般的に動名詞句 (gerundive nominals) と総称されるものであるが、本稿では名詞句の構造あるいは縮約関係節と類似した名詞修飾の構造を持つのではなく、その主要部の名詞の特性によって、いわゆる小節 (small clause) の構造と意味を持つ擬似補文であることを示す。

動詞や名詞の補部には補文 (complement sentence) と呼ばれる節が現れることはよく知られている。例えば下記(3)(4)の下線部はそれぞれ動詞句補文、名詞句補文である。

- (3) a. I found that the senator refused to take the bribe.
 b. I believe Sue to be telepathic.
 c. Alex advised the doctor to examine his dog.
- (4) a. The fact that he proved the theorem surprised all of us.
 b. Do you know his plan to swim across the river?
 c. What we should ask is the question whether he should resign or not.

また下記の下線部は、「屈折 (INFL) 要素」である時制 (TENSE), 一致 (AGREEMENT), 法助動詞 (MODAL) を欠くため, 小節 (small clause) と呼ばれることがあるが補文の一種であると考えられる。

- (5) a. I found the boys playing football.
 b. The children watched Tom moving the puppets.
 c. The senator had the committee investigate the affair.

ところで (5a) の下線部の構造は (6a) の補文の構造以外に, (6b) の関係節と同じ名詞修飾の構造とも解釈できる (名詞と動詞の最大投射をそれぞれ $N^3 (=NP)$, $V^2 (=VP)$ と仮定する, また PRO は空主語を示す)。

- (6) a. [s [_{N3} the boy] [_{V2} playing football]]]
 b. [_{N3} the [_{N2} [_{N1} boy] [s PRO playing football]]]

(5a) が (6a) の補部の構造を持つことは, (7)のように名詞句 (すなわち N^3) の移動によって派生される受動文や疑問文で, the boy のみを移動することが可能であることから分かる。

- (7) a. The boys were found playing football in the schoolyard.
b. Which boy did you find playing football there ?

また下記のような文でも，下線部が補部であると考えた方が都合がよいであろう。

- (8) a. I found Tom playing football, but he didn't admit it.
b. Helen frankly confessed herself baffled. So was I, although, for the sake of her morale, I didn't admit it. (LTC 53)

一方，(6b) の構造も可能であることは，例えば(9)のように名詞句 N^3 をまとめて受動文や話題化することが可能であることから分かる。

- (9) a. The boys playing football were found in the schoolyard.
b. The boys playing football, we found there.

では，(1)(2)はどのような構造を持つであろうか（説明のため(10)に繰り返し挙げておく）。動詞とその補部との関係と並行的に考えると，(10)の下線部を統率する前置詞の of は，後ろの名詞句に格を付与する機能を持つ Case-Marker であるので，その前にある主要部の名詞の性質が後ろの連鎖 NP+Ving の性質に投射されると考えられる。

- (10) a. The sight of chemicals changing colors would make her take leave of her senses.
b. There came the unmistakable sound of the outside door being opened downstairs.
c. There's a very strict university rule about students staying in

classrooms after hours without chaperons-especially students of mixed sexes. (LTC 51)

(10) の下線部の意味が, (10a) 「化学物質が変色する (光景)」, (10b) 「外側のドアが階下で開く (紛れもない音)」, (10c) 「学生が, それも特に男女学生が, 付添いなしで放課後教室に残る (ことに関する厳しい学則)」のように主要部の名詞の性質を反映して命題のように解釈されることには異論がないであろう。しかし命題の解釈を持つものには, (11) (12) のように「文」の構造を持つとは考えられないものがある。(11) の下線部は「潜伏疑問文 (concealed question)」と呼ばれ, その意味は間接疑問文と等価であるが統語構造としては名詞句の構造をもつ (Baker 1976, Grimshaw 1977, Inada 1988)。また (12) の下線を付した部分も節と同様の命題の解釈を持つと思われるがその構造や性質には明らかではない点もある (インフォーマントの反応によると (12c) はメモ書き的である)。

- (11) a. You don't know the kind of world I was brought up in. (WGC : 35-36)
- b. She broke away from your influence when she found the man that you are. (MEG III : 76)
- (12) a. FBI officials raised another conspiracy theory when they discovered that the grass at the shooting site was matted down in three places, suggesting that there might have been more than one gunman. But one person moving around could have matted the grass in the same way (*Newsweek* Jan, 1980)
- b. The exploration of the connectives is of much more interest for the light they shed on the importance of cross-cultural understanding... (Schourup, *Discourse Connectives*)

- c. Advantage taken of Parson's afternoon off (warning given ten days prior) suggests deliberate plan? (WGC : 21)

本稿では、(10)の下線部は、(11)(12)の場合とは異なり、その構造においても意味的特性を反映した小節の構造をもち、このいわば擬似補文を導入する前置詞 of が、前置詞補文化辞 (prepositional complementizer) としての機能を持つことを示したい。

2. 主要部による補部の選択

前節で見た前置詞 of に続く連鎖の性質を考察するために、まず前置詞句全体を補部としている名詞主要部の性質を見てみよう。(13)の名詞主要部は、端的に言う、命題 (proposition) あるいは事象 (Event) をその補部の「意味役 (semantic role)」として取るものである。そのような名詞と他の名詞の場合とを比較すると容認性の相違があることが分かる (*Xは、Xが容認されないことを示す)。

(13) a. There was the $\left. \begin{array}{l} \text{sound} \\ * \text{difference} \\ * \text{book} \\ * \text{article} \end{array} \right\}$ of the door being opened downstairs.

b. A horrible $\left. \begin{array}{l} \text{vision} \\ * \text{shooting} \\ * \text{hatred} \\ * \text{anger} \end{array} \right\}$ of the monster coming into the room surprised us.

即ちこの構文と共起可能な名詞主要部は、sight, picture, vision, sound, dream,

image, record 等の名詞類であるが,典型的なものは知覚動詞に対応する名詞類である(勿論, 全ての名詞が対応する知覚動詞を持つわけではないし, また sound of NP は, 動詞の sound ではなく hear NP にその意味は近い)。そこでその意味と形式が問題の名詞と類似している知覚動詞の補部を少し詳しく見てみよう。

(14) a. I saw the moon rising over the mountain.

b. I heard the outside door being opened downstairs.

知覚動詞の補部の構造として考えられる(15)の4つの構造のなかで, 最もその補部の特性を捉えているのは (15d) である。

(15) a. V NP VP (or XP)

b. V [_{NP} NP S]

c. V [_{NP} NP VP]

d. V [_S NP VP]

補部の構造は, 無標 (unmarked) の場合には, (16)の投射原理によって一般的に規定されるものである (Chomsky 1981 : 29, 38)。

(16) 語彙項目の語彙的特性 (特にその主題役 (thematic roles) の規定) は, 文のすべての表示のレベル (即ち, 基底構造, 表層構造, 論理形式) において保持される。

そして, 知覚動詞の補部への主題役の付与は(17)の語彙的基底に基づいてなされると考えられる。(17a) は, 知覚動詞のとり項に関する「意味的選択」を, (17b) は「範疇的選択」を示している。(範疇的選択における S は \bar{S} と区別される (bare))

S である, また意味的選択とは独立した範疇的選択の規定が必要かどうかは議論の余地がある)。

(17) a : <EXPERIENCER, THEME/EVENT>

b : [NP _____ { NP }
 { S }]

つまり補部が名詞句の時には「主題 (THEME)」となり, 補部が NP+Ving または NP+原形不定詞 (bare infinitive) のときには「事象 (EVENT)」と解釈される。(14)のような文では, 知覚の対象となるのは「目的語」の名詞句だけではなく補部全体となる (Gee 1977, Thompson & Kirsner 1978, Declerck 1981, 1982, Barss 1985)。このことは, 下記のような場合によく分かる (但し, インフォーマントによると (19b) は 'poetic' である)。

(18) a . The children watched Tom moving the puppets.

b . We heard the farmer killing the pig.

c . We smelled Mary beeswaxing the floor.

(19) a . I have seen faith accomplish miracles.

b . We saw there arise over the meadow a blue haze.

c . We noticed allowances being made for the young.

d . I heard it (be) said that John was ill.

Thompson & Kirsner 1978

(18a) では子供達が Tom の姿を見ていなくても, 隠れて人形を操っている様子を表すことができる (Declerck 1982, Garss 1985)。 (18) の他の場合も「目的語」の人物を直接知覚しているとは考えられない。また (19) のように, 動詞の直後の名詞句は直接的な知覚の対象となり得ない場合がある。これらの事実は, 事象全体が知覚の対象となることを示している。

(15)の構造に戻ると、(15a)は補部に2個の要素を持つため、上に述べた知覚動詞の性質(17a)を捉えていない。そしてこのように「投射原理」に違反する構造を知覚動詞の場合に認めなければならないという特別の理由はない。換言すると、このような構造は習得の際に語彙的情報と一般的原理以外の知識を必要とする有標的な構造となるので、他に根拠がなければ認められない。次に(15b)は、名詞の後置修飾(postnominal modifier)の構造を概略的に表したものである。知覚動詞の補部がこのような構造をしていないことは、補部の要素の抽出が可能であることから分かる。(20)のように、動詞が名詞句のみを目的語として取る時は、下線部は複合名詞句となるので一般的に要素の移動が阻止される。しかし知覚動詞の補部では(21)のように移動が可能である。

- (20) a. I met the man carrying your bag.
 b. *Who did you meet carrying the bag?
 c. *Which bag did you meet the man carrying?
 (21) a. I saw the moon rising over the mountain.
 b. What did you see rising over the mountain?
 c. Which mountain did you see the moon rising over?

Declerck 1982

(22)では、下線部の動詞の性質により、後置修飾の構造を持つと考えなければならないが、その場合には(21)のような要素の抽出は許容されない。

- (22) a. I saw the man resembling his father.
 b. *Who did you see resembling his father?
 c. *Whose father did you see the man resembling?

さらに、後置修飾節(や句)はその主要部に通常は個有名詞や代名詞を持つこ

とはないが、知覚動詞ではそれが可能である。

(23) a. John kicked $\left\{ \begin{array}{l} \text{the man} \\ * \text{Tom} \\ * \text{them} \\ * \text{himself} \end{array} \right\}$ standing in front of the mirror.

b. John saw $\left\{ \begin{array}{l} \text{the man} \\ \text{Tom} \\ \text{them} \\ \text{himself} \end{array} \right\}$ standing in front of the mirror.

この点では、問題の NP of [NP Ving] の構文においても、知覚動詞の補部と並行的である。(24)が示すように、後置修飾の構造とは明らかに異なっている。

(24) a. A horrible vision of myself working in my father's bakery popped into my mind. (LTC 35)

b. There won't be any record of you ever having seen the book. (UW 17)

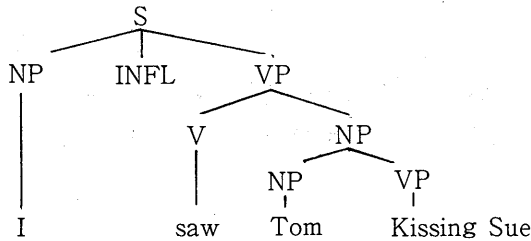
この構文では要素の抽出の可能性を調べることはできない。なぜなら、[NP NP of NP Ving] 全体が名詞句であるため、「下接の条件 (subjacency condition)」を破ることなく補部の要素を外に移動することはできないからである。次のように場合には、後置修飾構造の場合のように全く非文法的な文とならないにしても容認性は低い。

(25) a. ??He went to the bakery in which he had had a horrible vision of himself working with his father.

- b. *?Nobody can check the book that there won't be any record of you ever having seen in the library.

最後に、(15c) の構造の妥当性を検討する。この構造は Akmajian (1977) が知覚動詞の補部であると主張したものである。まず、この構造を生成する規則 NP → NP VP は、特殊なものでありこのような規則を認めるのは望ましくない。次に、この構造も(26)のように A-over-A の構造を持っているので、要素の抽出が阻止され、(15b) と同様の問題がある (Ving を随意的に外置するという分析も、線的順序の変化をとみなわないので妥当性に欠ける)。

(26)



Akmajian は、知覚動詞の補部は下記のように通常名詞句が生起する位置に現れるので名詞句であると仮定せねばならないとしている (但し、このうち (27c, d) は必ずしも名詞句の位置にあるとも、またそもそも知覚動詞の補部であるとも言えない)。

- (27) a. The moon rising over the mountain is interesting to watch.
 b. The moon rising over the mountain appears to have been seen by many people last night.
 c. What we saw was the moon rising over the mountain.
 d. The moon rising over the mountain, I've seen it often enough.

確かに、(27a) (27b) において (後置修飾ではなく) 補文の解釈も可能であ

れば何等かの説明が必要である。S はこれらの位置には普通生起できないので、知覚動詞の補部を (bare) S であるとするこの点では問題が残る。ここでは、(27a) (27b) のような場合に限って、Declerck (1982) に従って、擬似修飾構造 (pseudo-modifier) であると考えておくことにする。擬似修飾構造とは、(28)(29)の下線部が限定修飾とは異なるが後置修飾の一種であると仮定することである (詳細は省略)。

(28) a. The sheriff shot a man with a mask on.

b. The sheriff saw John with a mask on.

(29) It's easy to picture him in a straw boater and striped blazer as the banker at a carnival.

知覚動詞の補部が、主要部の動詞の意味特性によって予測される通り (15d) の (bare) S の構造を持っていると考えると、目的格の付与は認識動詞の場合と並行的に「例外的格付与 (exceptional Casemarking)」によって与えられる。

(30) a. I believe [s him to be telepathic]

b. I saw [s him coming back]

両動詞とも補文を導く補文化辞として for などを取らないので、S̄境界ではなく (bare) S 境界を持つことになる。そして S̄ と異なり S は主文動詞による格付与の障壁 (barrier) にならないので、適格に格が付与される。

(31b) はいわゆる動名詞句とは異なることも注意すべきである (中島1980)。

(31) a. I remember [{ you
your } standing in front of the mirror].
PRO

- b. I saw [$\left. \begin{array}{l} \text{you} \\ *your \\ *PRO \\ \text{myself} \end{array} \right\}$ standing in front of the mirror].

(31a) の動名詞句の場合と異なり, (31b) の知覚動詞の補文主語は主文動詞に統率されるのである。

3. 独立前置詞句 (absolute PP phrase) と前置詞の補部

前置詞は一般的に名詞句を補部とし, 文の前に現れることはない。
例えば(32/33)が一般的な前置詞の分布である。

- (32) a. Alex is afraid of the mistake.
 b. Alex is afraid that he will make some mistakes.
 c. *Alex is afraid of that he will make some mistakes.
- (33) a. John insisted on her leaving for Boston.
 b. John insisted that she should leave for Boston.
 c. *John insisted on that she should leave for boston.

しかし間接疑問文の前では下記の例が示すように前置詞が現れることがある。

- (34) a. the question (of) whether she should leave or not
 b. It is not certain (as to) who had taken the bribe.

従って, 下記のような場合, いわば格付与のための中立的な (特定の主題役を与えない) 前置詞である of が (bare) S の前に存在すると考えられないであろうか。

- (35) a. Mr. MacGregor had referred to the possibility [that there was a double agent in the Watergate operation].
b. Mr. MacGregor had referred to the possibility of [there being a double agent in the Watergate operation]... (WH : 151)

通常 NP を補部とする前置詞 (のなかの特殊なもの) が, S をも補部とするように拡張されることがあることを, まず独立句 (absolute phrase) と呼ばれる前置詞句について見てみることにする。

Ishihara (1982) は, 下記のような Absolute Phrases を導く前置詞 *with* は, 不定詞句を導く補文化辞の *for* と同様に, 前置詞的補文化辞 (prepositional complementizer) として (bare) S をその補部とすることがあると仮定している。

- (36) a. The car with water leaking from its engine is useless.
b. De Gaulle, with Fido following him faithfully, inspected the squadron.
c. The dog started barking, with the phone ringing unanswered.

Ishihara 1982

(36a), (36b) はそれぞれ制限的關係節, 非制限的關係節に対応するもの, また (36c) は副詞句 (または節) に相当するものである。ここで特に関係があるのはこれらの句が下記のように S を含むと考えられる点である (全てのタイプに付いて言えるが (36c) の場合の例のみを挙げることにする)。

- (37) a. With him arriving tomorrow, I've got to find the airport.
b. With there being so many tourists in the city, the tourist business is

booming.

- c. With it snowing outside, Santa greeted the children at the hospital.

これらの独立前置詞句の性質は、他の前置詞が名詞句や動名詞句のみをその補部にする点を考え合わせると特に興味深い。他の前置詞との(38)の相違は、(38a)では補文主語の *himself* が *with* に束縛された (bare) S のなかにあり、(38b) (38c) では束縛されない空主語 PRO であることを示している。

(38) a. With himself running the show, John can do anything he wants.

b. After (*himself) cleaning the room, John went to the movies.

c. By (*herself) arresting the criminal, Mary showed great bravery.

3. 構造的な類似による補部の拡張

通常、 \bar{S} を補部にしないはずの前置詞が (bare) S をとりうるのは、補部が補文化辞を欠くときに前置詞がその機能を補足しようとするからであると考えられる。歴史的に前置詞から発達して補文化辞の機能を (も合わせ) を持つようになった、*for* の働きと類似していることが分かる (但し、*With* は付加部のみを *for* は補部をも導入するという相違点がある)。

(39) a. We hope for peace.

b. We $\left\{ \begin{array}{l} \text{arranged} \\ \text{planned} \end{array} \right\}$ for the party.

(40) a. We $\left\{ \begin{array}{l} \text{hope} \\ \text{arranged} \\ \text{planned} \end{array} \right\}$ [for John to win the race].

- b. *We $\left\{ \begin{array}{l} \text{hope} \\ \text{arranged} \\ \text{planned} \end{array} \right\}$ [John to win the race].

(39)のように, hope, plan, arrange, waitなどは自動詞として前置詞 for をとること, また (40b) が容認されないことからなどから, (40a) の補文化辞 for は前置詞の機能を持つと考えられる。このことから Ishihara (1982) が主張するように下記のような構造の並行性が with の補文化的な機能を支えているとするのは不自然ではない。

- (41) a. [\bar{s} for [s...]]
 b. [pp for [NP...]]
 c. [pp with [NP/S...]]

同様に下記のような名詞句補部の場合にも同様の構造的な類似性があると思われる。

- (42) a. the idea/claim/possibility [*s that* [s John will win the race]]
 b. his plan/arrangement/hope [\bar{s} *for* [s John to win the race]]
 c. the possibility [pp *of* [s there being a big earthquake]]
 d. the image [pp *of* [s himself working in the bakery]]

この様な他の補文化辞との並行性は, with の場合よりも(42)の名詞句では更に強いと考えられる。まず(43)の構造が示すように, 前置詞句を含む名詞句全体の構造に並行性がみられること, 次に主要部の名詞 sight, sound, vision, image の意味的特性がその補部全体に投射されることにより, 前置詞句の構造が拡張される点などである。

- (43) a. [DET N [s that [S]]]
 b. [DET N [s for [S]]]
 c. [DET N [PP of [S]]]

興味深いことに、知覚動詞に類似した下記のような文が存在し、その補部は部分的に（複合）動詞の補部にも前置詞補部にも似ている所がある。

- (44) a. I caught sight of this girl smiling at Miss Francis.
 b. You should not keep your eyes on a few German officers talking nonsense and a few scaremongers here making a fuss about nothing.

前置詞の補部がその主要部の名詞の意味特性の投射によって、名詞句のみならず前置詞的補文化辞に導かれる節を取るという仮定そのものは妥当であると思われるが、擬似修飾の構造や動名詞句構造との部分的な類似などさらに検討の余地がある。

参考文献

- Akmajian, A. 1977. "The complement structure of perception verbs in an autonomous syntax framework." In *Formal syntax*, P. Culicover, T. Wasow and A. Akmajian (eds.) New York: Academic Press.
- Baker, Carl L. 1969. *Indirect question in English*. Doctoral dissertation, University of Illinois.
- Barss, Andrew 1985. "Remarks on Akmajian's 'The complement structure of perception verbs' and Gee's 'Comments on the paper by Akmajian.'" In *Lexical semantics in review*. B. Levin (ed.) MIT.

- Chomsky, N. 1981. *Lectures on government and binding*. Dordrecht : Foris.
- Declerck, R. 1981. "The structure of infinitival perception verb complements in a transformational grammar. In *Problems in syntax*, L. Tasmowski-De Ryck (ed.) _____ . 1982. "The triple origin of participial perception verb complements, Linguistic Analysis 10.
- Grimshaw, Jane B. 1979. "Complement selection and the lexicon." Linguistic Inquiry10.
- Inada, Toshiaki (稲田俊明) 1988. 「異なる範疇の等位接続」『英語教育』11-12月号, 大修館。
- Ishihara, Roberta Lynn 1982. *A study of absolute phrases in English within the government binding framework*. Doctoral dissertation, University of California, San Diego.
- 中島文雄 1980. 『英語の構造 (上・下)』岩波新書
- Thompson, S. and R. Kirsner 1978. "The role of pragmatic inference in semantics: a study of sensory verb complements in English." Glossa 10.